



TITLE:

編集後記 (泌尿器科紀要 第7巻第
6号)

AUTHOR(S):

CITATION:

編集後記 (泌尿器科紀要 第7巻第6号). 泌尿器科紀要 1961, 7(6): 696-696

ISSUE DATE:

1961-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/112144>

RIGHT:

編集後記

医学の研究は段々に細かい専門領域に分かれてゆく傾向があると共に、他方には総合して研究しようとする現象も見られる。内科は呼吸器科、循環器科等に分化し、外科からは耳鼻科や整形外科等が分かれ、更に脳外科、胸部外科等が分かれてゆく。泌尿器科は整形外科の如くに外科の一分科と考えてもよく、又、皮膚科と混合していたのが分離したとも考えられる。このように内科も外科も分科してゆくが、それと共に、個々の問題、例えば化学療法、内分泌等に就ては、各科がそれぞれの立場から研究して、総合的成果を挙げる。泌尿器科も一つの専門分科として発展すると共に、他の部門と共同して進んでゆく。このように分化と総合が行われる事によつて学問は進歩する。この問題と多少の関連のある一つの事柄に就て考えてみよう。

泌尿器科以外の教室、例えば或る外科教室に於て、泌尿器外科を特に盛んに取扱つていると仮定する。その教室は外科学会よりも泌尿器科学会の方に関心を持つて出題する。そうするとその大学にては、泌尿器疾患々者は外科へ行く。もしその大学にまだ泌尿器科が設置せられていなければ、その大学に泌尿器科講座の新設せられる事が遅れる。泌尿器科の独立を願つている我々の期待に反する事になる。我々から云えば、一般外科の中に於て泌尿器科の研究が行われるよりは、泌尿器科を新設するか、或は外科から出て泌尿器科の中に入つた上で泌尿器科の研究を行つてほしいと思う。然し泌尿器科としても徒らに小さく固まつてしまうつもりはなく、知識を広く各界に求める事は勿論必要であり、基礎からも臨床からも知識を吸収し消化せねばならぬ。然しそれはあくまでも泌尿器科を中心としてである。どの大学にも、いずれは泌尿器科が独立せられるべきである。それを妨げるような事は排除せられねばならぬ。



以前にも書いた事があるが、泌尿器科の論文が大学雑誌等に掲載せられている事がある。それには勿論理由のある事であろうが、泌尿器科の専門医の目に付きにくいと云う難点がある。泌尿器科の論文は、なるべく泌尿器科の専門誌に載るのが利点が多いであろう（昭和36年6月）

購読要項

1. 発行は毎月（年12回）とする。年間購読者を以て会員とする。
2. 会員は年間料金 1,000円を前納する。1冊料金 100円、払込みは振替口座番号京都4772番泌尿器科紀要編集部、或は第一銀行百万遍支店。
3. 入会申込みは氏名（フリガナ）、住所（雑誌郵送先）、勤務先、職地位、自宅開業の別、送金方法を御記入の上編集部宛。

投稿内規

1. 原稿の種類は綜説、原著、臨床報告、その他、寄稿者は年間購読者に限る。
2. 原稿の長さは制限しないが簡潔にする。
3. 原稿は横書き、当用漢字、平仮名、新仮名使いを用い、片仮名には括弧を要しない。400字詰原稿用紙を用いること。附表、附図はなるべく欧文にすること。
4. 文献の書式は次の如くする。著者名：誌名、巻数：頁数、年次。
例、中野：泌尿紀要、1：110、昭30。Lazarus, J. A. : J. Urol., 45 527, 1941.
5. 300語以内の欧文抄録を記し、之には欧文の標題、所属機関名、ローマ字著者名を附け、なるべくタイプライターを用いること。希望の場合は当編集部にて翻訳します。抄録用の原稿を送ること。翻訳の実費は申受く。
6. 掲載料は4頁迄毎頁600円、それ以上の頁、アト頁、図表、写真は実費を申受ける。別再20部を無料贈呈、それ以上は実費を徴収する。この場合には予め希望部数を申込むこと。特別掲載も考慮する。
7. 校正は初校のみ著者校正とし、再校以降は編集者が行う。
8. 原稿送り先は京都市左京区聖護院京都大学病院泌尿器科紀要編集部。